

二〇二二年二月一八日

水底に鯉身じろがず春寒し  
東の間を霏霏と舞ひたる春の雪  
春の雪降り継ぐ峽の灯の乏し  
端切れ編む草履に春の色選ぶ  
空き部屋の一面鏡にある余寒  
万蕾の椿を包む春の雪  
料峭や病氣平癒の礼詣で  
墓地募るあまたの旗に風花す  
かたまりて春の色なすフラミンゴ  
街の灯の遠またたきや冴返る  
頼もしき除雪車今日も出動す

二〇二二年二月一七日

遠山の雪ほのと染め夕日落つ  
かな文字を散らす色紙に折り雛  
木々芽ぐむかとたとほる池塘かな  
犬ふぐり売れ残りたる分譲地  
日をはじく富士の天辺冴え返る  
夕東風にまたたき初めし星かぞふ  
水温み上機嫌なる水車かな  
狛犬の頭巾となりて残る雪  
遅れ来て満員通過バス寒し  
磴百段てすり待みに梅探る  
早春の風が頬刺すダム湖畔

二〇二二年二月一六日

ひさかたの濁世はいかが雛飾る  
雪解水高鳴る峽の疎水かな  
淡雪やお染久松ひとつ碑に  
背を押され大縄跳びの輪に入る  
冴ゆる夜の黒柱きしむ音  
門冠り松に余寒の雨しずく  
踏めば鳴る白砂の浜の余寒かな  
金泥の老舗看板春の雪  
雪晴れや二間四方の堂に千木

二〇二二年二月一五日

夫からおこぼれもらふ愛のチョコ  
白き肩艶めく畑の春大根  
方言の解読不能四温晴  
味噌仕込む三角巾の媼どち  
観音の翳す指先凍て返る  
剣山のごと松葉立つ薄氷  
伊予柑の梱包解けば匂ひ立つ  
白雲の伸びては千切れ春遅々と  
日の射して薄氷の簞緩みけり

二〇二二年二月一四日

野地蔵は雪解の音を聞きませり  
風に颯られて千切れる波の花  
宅配の濡れて届きし春の雨  
島影と思ふ灯しや夕霞  
鯉すすむ水脈の波紋に風光る  
春火鉢抱きて旅程練りにけり  
春炬燵走り書きなる置き手紙  
愛のチョコ小ぶりなれども夫機嫌

二〇二二年二月一三日

四百年続く茶店の長火鉢  
百本の梅の万蕾碧天へ  
二〇二二年二月一二日

駆けてゆくランドセルの子花菫  
墳寒し磊々高く積みしのみ  
古着の荷広げ参道春隣  
木漏れ日の綾なす影や雪間草  
大家なる茅葺き屋根に風花す  
野の春を見つける課外授業かな  
娘を送る春宵の街回り道  
空掘の底ひにのぞく物芽かな  
足に根の生えしと思ふ炬燵かな

なつき

満天

あおい

つくし

宏虎

宏虎

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

菜々

毎日句会みのる選・二〇二二年二月二〇日